琉球新報　2019年（平成31年）2月27日　第3種郵便物認可

文化

沈黙に向き合う

沖縄戦 聞き取り47年 〈35〉

石原 昌家

地域史づくりに新風

戦災調査、各地に広がる

浦添市史の編集

浦添市史の編集作業は、地域史づくりに新風を吹き込み、「浦添方式」と称されるようになった。

まず浦添市史の編集事務局が各集落を丹念に回って、さまざまな体験をしてきたり、その集落にまつわる事柄に詳しい長老（古老）たち（男女）をピックアップしていった。そのような準備段階を経て、事務局は歴史・民俗・民話・言語・社会学（フィールドワーカー）など、さまざまな分野の専門家に調査執筆を依頼していった。

シマ語れー会

事務局では、「シマ語れー会（故郷を語り合う会の意）」という名の下に、各集落の公民館にその地域の長老たちに足を運んでもらい、調査執筆予定者の専門家が数人単位で大まかな聞き取りをしていき、話者としての得意な分野の把握に努めていった。それをもとに事務局が聞き取り相手の名簿を作成していき、それを足がかりにして執筆予定者は、調査に取りかかっていった。

沖縄戦戦災実態調査は、悉皆（全数）調査だから特にそのような名簿を必要とはしていなかったが、兵士、防衛隊、義勇隊、救護班、炊事班などの個々人からの聞き取り調査には、その名簿は貴重だった。

しかも、1979年2月に糸満市国吉集落の戦災実態調査に石原ゼミ生として参加していた新垣安子さんが、大学卒業後まもなくその実績が評価され、「即戦力」として編集事務局に採用されていたので、戦災調査・戦災地図作成はほとんど支障なく実施することができた。

それまでの地域史づくりにこのような取り組みの前例がなかったので、他所から「浦添方式」と称されるようになった。とくにその後の地域史づくりには、それぞれの地域が調査項目を増やした沖縄戦戦災実態調査が定着していき、体験証言と数量的な沖縄戦被害調査の結果が集録されるようになっていった。

反響

1984年3月、「浦添市史第五巻 戦争体験記録」が発刊された。すでに調査段階で全国紙でもその調査が注目されていたが、刊行時の記者会見でイラストのとおり1984年3月25日、琉球新報は「よみがえった〝戦死者〟」の見出しで大きく報じた。同日、沖縄タイムスも「画期的な『戦災地図』作成／浦添市の戦死者数、避難壕、陣地など／実相、より鮮明に」、同日、朝日新聞は「沖縄戦の犠牲、浦添市で全声〝復元〟調査／全住民の半数が死亡／沖縄国際大3年がかり／家屋は99%が全壊／公式記録上回る死者」、同紙はさらに29日にも「沖縄のページ」で「浦添市史の第五巻／犠牲者の解明に光／注目集める戦災地図／全市町村に広げれば…」と、それぞれトップ記事で扱っているところに、注目の度合いを知ることができる。

テレビでもそれぞれとりあげていき、とりわけNHK教育テレビは、全国放送で午後8時45分から9時までの間の「テレビコラム」で「沖縄戦を掘る」というタイトルで、15分弱も沖縄戦の惨状を伝える時間を私に与えてくれたのも特筆すべきできごとだった。

そして「浦添市史第五巻」戦争体験記録は「市民による戦争告発の書ともなっており、なかでも『資料にみる沖縄戦』の実証と数字による激戦地域の実態調査は圧巻である」という賛辞をうけ、第5回沖縄タイムス出版文化賞特別賞を受賞するに至った（1984年12月24日授賞式）。

学生の自主活動

この浦添での「戦災実態調査」にかかわった学生たちは、自主的に75年、仮称で立ち上げていた「戦争体験記録研究会」を81年に正式に発足させ、登録科目の延長線上でさらに戦災調査活動の範囲を広げていった。

学生たちは「私たちがいまやらなければ、歴史が闇に消えてしまう」を合言葉に、「次代へ」という手作り機関誌も発行し、発表の場も自ら立ち上げていった。連載32回（1月22日）で紹介した「もうひとつの沖縄戦―マラリア地獄の波照間島」（沖縄文庫・ひるぎ社）の著者が「石原ゼミナール・戦争体験記録研究会」となっているのもその成果の現れであった。

さらに、宜野湾市字嘉数、西原町字徳佐田・小橋川・桃原（共同調査）、旧真和志村（現在那覇市）真地、東風平町世名城（各単独での調査）の調査成果を「大学生の沖縄戦記録」（1985年10月ひるぎ社）として発刊した（調査員41人の中に、琉大生6人と平和祈念資料館職員1人含む）。その本に、月刊誌「世界」（85年6月号）が「沖縄戦40年」特集のなかで座談会「復帰後世代のみた沖縄戦―沖縄国際大学石原ゼミの調査の中から」（大城恭子、金城美智子、湧川紀子、知念弘聡、翁長洋、司会編集部）を企画したが、それを転載できたのも、75年から10年にわたる大学生の沖縄戦調査を総括する内容だったので幸いだった。

また、毎年の「慰霊の日」の前になると、地元・沖縄のテレビは、若者たちの沖縄戦記録活動として、毎年のようにその調査活動を取材して紹介した。地元紙の琉球新報、沖縄タイムスはもとより、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞などの全国紙が学生たちを取材し、その活動に光をあてていった。

反省

私は「大学生の沖縄戦記録」のまえがきで、「どんなに慎重に取り扱ってきてもおこしてはいけない戦死者数の数字の間違いがでてきて、ショックを受けたものである。本書を世に出すにあたっても、ためらいはあるがあえて公刊する理由には、沖縄戦戦災調査が可能な残り時間が後わずかしかないことを、調査過程で痛感しているからである。私たちの力には当然限界があるので、沖縄全域で一斉に戦災実態調査が開始されるステップになればと願っている」と結んでいる。

この失敗と願いは、10年後の95年6月23日に除幕した全戦没者刻銘碑「平和の礎」に活かされていくことになった。

（次回は3月後半掲載）

よみがえった〝戦死者〟

多い申請もれ

公式発表と大きなズレ

浦添市がユニークな戦争体験記

全家庭を調査

戦災実態調査の結果を集録した「浦添市史　第五巻」発刊を伝える1984年3月25日付「琉球新報」